

A Sister of Mercy としてのヘスタ・プリン

鈴木元子

Hester Prynne as a Sister of Mercy

Motoko SUZUKI

Nathaniel Hawthorne の代表作 *The Scarlet Letter* (1850) のヒロイン Hester Prynne は、女性像として見ると三期に分けられる。第一期を結婚するが夫は行方不明、その後姦淫の罪を犯すまでとすると、第二期はこの作品の大部分を占めるもので、娘パールの母親としての時期となり、第三期は娘を嫁がせた後、地域の女性たちの相談役として奉仕の日々を送るヘスタとなる。ただし、この奉仕女としてのヘスタは、パールを育てていくうちに、かつては異性に向けられた情熱が自分の娘への母親としての愛情となり、さらにはその愛情が娘以外の他者にも拡大されて表出していくものなので、時期的には第二期の半ばからである。それから、一旦ヨーロッパに娘共々渡りながらも、自分独りで、故郷と定めたこの地に帰ってきたときに、完全に自己のアイデンティティーを確立するに至る。つまり、ヘスタ・プリンは一生涯において、愛に溺れた女性（姦淫の女）、母親、自称修道女という三様態の自分を有したことになる。ホーソーンのエスタ・プリンというと、瞬間的に「罪の女！」と反応してしまうほどに、このイメージが固着しているが、作品の中の分量から言えば、それは細切れ的にあちらこちらに回想の形でそれとなく仄めかされているに過ぎない。不倫の現場についても、何ら描出されてはならず、読者の想像によるしかない。作品の大部分は生まれたばかりの赤ん坊を抱えて、人々の偏見と非難の中を果敢に生きていくシングル・マザーとしての、七年間の、ヘスタの苦悩ながらも強い性格を突き通す姿が描出されているのである。

これまでヘスタの女性像のうち、前の二者について研究し論文にまとめてきたので¹、今回はこの最後の女性像、ヘスタ像としてはほとんど取り上げられていない“a Sister of Mercy”の面を取り上げて論じることを目的とする。

作品のちょうど半ばの13章“Another View of Hester”に、処刑台に立ってから七年後のヘスタについて、特にその変容の様子が記されている。それは第二パラグラフの冒頭の、“Hester Prynne did not now occupy precisely the same position in which we beheld her during the earlier periods of her ignominy.” (160)の言葉に要約される。

以前、処刑台に立ってから、町外れの田舎家でパールと二人きりの生活を始めたヘスタにつ

いて、5章の“Hester at Her Needle”の中で次のように描写されたことがある。

Throughout them all, giving up her individuality, she would become the general symbol at which the preacher and moralist might point, and in which they might vivify and embody their images of woman's frailty and sinful passion.(79)

当時、女性の脆さや罪深い情熱の化身として、「一般的な記号」となっていたヘスタが、皆に尊敬されるようになったという。ではこの罪の女の変貌に比べて、他の男性たちはどうなっていたのだろうか。

8章“*The Elf-Child and the Minister*”で、ヘスタは自分の合法的連れ合いである *Chillingworth* の変化を認めて仰天する場面がある。

Hester Prynne looked at the man of skill, and even then, with her fate hanging in the balance, was startled to perceive what a change had come over his features, --how much uglier they were, --how his dark complexion seemed to have grown duski-er, and his figure more misshapen,--since the days when she had familiarly known him. (112)

ヘスタはチリングワースの容貌が醜く変化しているのに対して、彼の魂や心が暗くて悪い方向へ向いていることを直感して驚くのであるが、その直感は正しかった。

At first, his expression had been calm, meditative, scholar-like. Now, there was something ugly and evil in his face, which they had not previously noticed, and which grew still the more obvious to sight, the oftener they looked upon him.(127)

Dimmesdale についても、8章で、“He looked now more careworn and emaciated than as we described him at the scene of Hester's public ignominy; . . .”とあるように、彼は健康の衰えと大きな苦悩をその眼中にたたえるようになっていた。ナレーターはその容貌の変化と内面の精神的变化とを結び合わせて、その関連性に注目している。それは、*ディムズデル* の場合は、“A strange sympathy betwixt soul and body!” (138) の言葉に言い表されている。すなわち、*ディムズデル* の魂の呻吟が、魂の宿主であるその肉体を悪くしているということに、医者であるチリングワースが気づいていく箇所である。チリングワースに関して、内面の心が復讐の鬼と化すことで、外面の容貌もまた悪魔のように変化したと描写されている。ナレーターは、明確に“this diabolical agent” (128) と書いて、チリングワースを「悪魔の代理人」とさえ呼んでいるのである。

これに対して、ヘスタの容貌の変化はどうであったか。醜く変じるどころか、*ベリンガム* 知事の屋敷の奴隷男は、“she was a great lady in the land” (104) とまで判断しているではないか。このエピソードの言外の意味は大きい。

牧師と学者（医者）という社会的にも尊敬される職業についている男性二人に対して、ただの主婦、いや、姦淫の女という、社会的には最底辺にまで降って行ってしまった女性が、七年という年月を経てどこまで浮上してきていたのか。実は、二人の男性たちとは逆に、“the

blameless purity of her life ” (160)と、施しの行為によって彼女への評価は上昇し始め、人々の尊敬を受けるに至っていたのである。少し長いが、その部分を引用してみよう。

None so ready as she to give of her little substance to every demand of poverty; even though the bitter-hearted pauper threw back a gibe in requital of the food brought regularly to his door, or the garments wrought for him by the fingers that could have embroidered a monarch's robe. None so self-devoted as Hester, when pestilence stalked through the town. In all seasons of calamity, indeed, whether general or of individuals, the outcast of society at once found her place. She came, not as a guest, but as a rightful inmate, into the household that was darkened by trouble; as if its gloomy twilight were a medium in which she was entitled to hold intercourse with her fellow-creatures. There glimmered the embroidered letter, with comfort in its unearthly ray. Elsewhere the token of sin, it was the taper of the sick-chamber. It had even thrown its gleam, in the sufferer's hard extremity, across the verge of time. It had shown him where to set his foot, while the light of earth was fast becoming dim, and ere the light of futurity could reach him. In such emergencies, Hester's nature showed itself warm and rich; a well-spring of human tenderness, unfailing to every real demand, and inexhaustible by the largest. Her breast, with its badge of shame, was but the softer pillow for the head that needed one. She was self-ordained a Sister of Mercy; or, we may rather say, the world's heavy hand had so ordained her, when neither the world nor she looked forward to this result. The letter was the symbol of her calling. Such helpfulness was found in her, -- so much power to do, and power to sympathize, -- that many people refused to interpret the scarlet A by its original signification. They said that it meant Able; so strong was Hester Prynne, with a woman's strength.(161)

すなわち、ここで、ヘスタは看護婦のように医療活動をし、また牧師がする牧会のように人々の世話をすることで、皮肉なことに、働きの上でも元夫、元愛人とほとんど同じような働きをこなすようになってきていたのである。人々から必要がられてもいた。しかし住民との関係は、“inmate” (161)として、また“fellow-creatures” (161)としての交わりであり、“her sisterhood with the race of man” (160)という横の關係に終始していることがその特徴と言える。そこで、宗教的に高位者から按手をされるのではなく、“She was self-ordained a Sister of Mercy” (161)であって、“the world's heavy hand had so ordained her” (161)というように、あくまでも自分と民衆による是認を意味していた。

「姦淫」を表す“A”の文字は、“Able” (実力のある)の“A”や、“the token . . . of her many good deeds” (162)になり、さらには、“the scarlet letter had the effect of the cross on a nun's bosom” (163)となって、ここでも修道女のイメージが強調されている。

評判が上がったことで、胸の緋文字を取ってもらうこともできたが、社会の権威者たちにあえて取ってもらうことは拒否するのであった。つまり、彼女にとって大切なのは、実質であって、決して権威や形式ではなかったからである。そこが、形式を重んじるディムズデルや、男の面子を汚されたことで悪鬼と化すチリングワースたち二人の男性とは異なる所である。

ここに登場する“Sister of Mercy”⁷⁾という固有名詞についてであるが、これは1831年にアイルランドのダブリンで、Catherine Elizabeth McAuley (1787-1841)によって創立されたローマ・

カトリックの女子修道団体の名前である。1822年までに、彼女は貧しい少女たちの教育・訓練プログラムを開発し、困窮者に食物と衣類を配給し、他にも様々な慈善の仕事をする。1827年にその宗教生活に引かれた富裕な女性たちの援助で、ダブリンにセンターを設ける。アメリカ合衆国におけるこの団体の活動については、まずアイルランドのカーローから派遣された七人の修道女がペンシルバニア州のピッツバーグに、1843年にこの団体を設立することから始まる。そして、1970年代初頭には、合衆国中に一万二千人の修道女を抱えるまでに大きく成長している。

ホーソーンは『緋文字』を17世紀のボストンを舞台にして執筆しながら、アメリカに1843年に設立されたばかりのローマ・カトリック女子修道団体の名を1850年の作品に入れてしまったということになる。創始者のキャサリン・マッコレーは、幼少の頃カトリック教徒の両親と死別し、プロテスタントの親戚に育てられる。彼女は残された遺産を貧しい人々のために使うことを決意し、貧しい子供たちに教育を施し、ホームレスの若い女性たちに部屋と食べ物を与えることから始めており、今で言うマザー・テレサのような人であった。

このように、修道女的な面がヘスタの内に形成され、日ごとに大きくなっていったにも関わらず、どうしてこれまでこの部分が大きく取り上げられることがなかったのだろう。それは、ヘスタと、年若くして（結婚せずに）神に献身するカトリックの修道女とは根本的に違うという印象があるからではないか。ヘスタの“a Sister of Mercy”としての面が、読者には実際、印象づけられにくい。彼女の善行自体が信じられない、といった読者もいるかもしれない。すなわち、ヘスタの精神的内面が、ピューリタニズムから解放された自由思想に裏打ちされているので、それがカトリックの修道女のイメージとそう簡単には適合しないのである。しかしまた、ヘスタが人々を欺くために、たとえば、良い評判を得るためにとか、早く緋文字を取ってもらいたい一心で偽善の行為に走ったとは絶対に考えられない。彼女はそんな小賢しい性格ではないからである。

魂のレベルが上がっていったことは、ナレーターが認めていることである。“She had climbed her way, since then, to a higher point. The old man, on the other hand, had brought himself nearer to her level, or perhaps below it, by the revenge which he had stooped for.” (167)

しかしながら、ヘスタの霊性の向上は、内容的に言ってピューリタニズムが完全に是認するものでは決してない。といて、彼女が全くの異端とか、異教徒というわけでもない。無神論者でもないし、仏教徒やヒンズー教徒、イスラム教徒でもない。ヘスタはやはり、キリスト教の大きな枠組みの中にまだ収まっていると考えられる。その証左として、森でヘスタと数年ぶりに二人きりで会ったディムズデルが、彼女からどんな影響を受けたか、から検証してみることができる。

森でヘスタに会い、家族三人で新しい世界へ逃げる決心をして町に帰るディムズデルについては、“It was the same town as heretofore; but the same minister returned not from the forest.” (217) と明言されている。ナレーターは、まず牧師を墮落した男と言って、“this sorely tempted, or--shall we not rather say?--this lost and desperate man” (219) と記述している。これはピューリタニズムの視点で牧師を評価した場合の言葉である。ところがもう一方で、“That self was gone! Another man had returned out of the forest; a wiser one; with a knowledge of

hidden mysteries which the simplicity of the former never could have reached. A bitter kind of knowledge that! ” (223)と書いて、むしろ牧師の変化を肯定的に捉え、それも苦難の末に人生の複雑な知識を持って森から帰ったとも理解している。すなわち、これは明らかにヘスタの影響を仄めかしている言葉である。このように、牧師に対する相反する評価は、そのままヘスタの内面（生きる力、苦き知識、ドグマへの不服従）を評価する言葉として受け取ることができる。ピューリタンの戒律からすると墮落した人間であっても、人間らしさ、純粹さ、素晴らしい共感の情を備えたヘスタ、隣人を生かそうとする愛と奉仕の精神で満ちているヘスタである。

森から自分の部屋に戻ったディムズデイルがまずしたことは、途中になっていた選挙祝賀の説教原稿を火の中に投じることであった。

Then, flinging the already written pages of the Election Sermon into the fire, he forthwith began another, which he wrote with such an impulsive flow of thought and emotion, that he fancied himself inspired; and only wondered that Heaven should see fit to transmit the grand and solemn music of its oracles through so foul an organ-pipe as he. (225)

彼が靈感に導かれて書いた新しい説教の出来栄とその特徴については、次のように表現されている。

According to their united testimony, never had man spoken in so wise, so high, and so holy a spirit, as he that spake this day; nor had inspiration ever breathed through mortal lips more evidently than it did through his. (248)

ここで非常に強く打ち出されているのは、神の霊、すなわち聖霊という概念である。ナレーターは、牧師の靈感に満ちた説教に注目している。

This idea of his transitory stay on earth gave the last emphasis to the effect which the preacher had produced; it was as if an angel, in his passage to the skies, had shaken his bright wings over the people for an instant, --at once a shadow and a splendor, --and had shed down a shower of golden truths upon them. (249)

ここに「天使」の比喻が出てくるが、実は森の中で再会したヘスタをディムズデイルは天使と呼んでいるのである。

『緋文字』という作品において、初めから強調されてきたことは、神の裁きという概念であった。二人は神の裁きに値することをしでかし、ヘスタは人々の手によって神の裁きを受け、さらに人々の目と人々の扱いによっても、神の裁きを受け続けた。ディムズデイルは、同じことをしても、本来、牧師という職業上、ヘスタよりももっと大きな神の裁きを受けねばならなかった。しかし、彼はその裁きを逃れる。そして、逃れるばかりか、牧師としての聖職の仮面をかぶり、人々を騙すという新たな罪をも犯し続ける。さらに、その重圧と罪の大きさから、ますますその状況を打開することは困難となり、自虐的に自己破壊のムチを振るうことでなんとか

気持ちのバランスをとるが、それも時間の問題となる。

そのような袋小路にはまった男に、新しい生きる道があることを示すのがヘスタである。ヘスタの信念の第一の特徴は、生命、生きることの尊さをまず第一とすることである。エーリッヒ・フロムの言葉を借りれば「母の愛」ⁱⁱⁱ と言えようか。すなわち、生に対する愛を徐々に子供に浸透させていき、生きることは良いことであり、子供としてあることは肯定され、この地上にあることは良いことなのだという感じをもたせるところの態度である。聖書の天地創造の物語にあるように、神が造られたものは全てが善かったし、神が民に約束されたのは「乳と蜜で満たされた土地」であったが、これこそが母性愛を象徴するものである。

森で、そんなヘスタを評して、ディムズデイルが叫んだ言葉は以下の如しであった。

O Hester, thou art my better angel! I seem to have flung myself -- sick, sinstained, and sorrow-blackened -- down upon these forest-leaves, and to have risen up all made anew, and with new powers to glorify Him that hath been merciful! (201-2)

“Angel”には、キリスト教信仰における“messenger or attendant of God”の意味と、もっと一般的な“beautiful, innocent or kind person”^{iv}の意味がある。この箇所でも、両方の意味が含まれていると考えられる。ディムズデイルにとって、ヘスタは美しく、純粋な気持ちの持ち主で、また親切に自分を心配してくれる、優しい人である。そして、それだけに終わらず、牧師にとって、ヘスタと出会ったことにより、長い間忘れかけていた何かを取り戻すことができた。天使を元来の「神の使者」という意味にとると、父なる神の裁きにばかり脅えていた牧師が、ヘスタを通して、ヘスタの背後で働かれる神、すなわち神には慈悲深さもあることを想起させられた、ということにはならないだろうか。

エーリッヒ・フロムは、「宗教の母家長制的な局面においては、私は神を、すべてを包みこむものたる母親として愛する。たとえ私が貧しかろうと、無力であろうと、たとえ罪を犯そうと、私を愛するであろうし、他の子供たちと私をわけへだてなく愛する母親の愛を信ずるのである。私になにが起ろうと、彼女は私を救い、助け宥すであろう。」と語る。罪を犯したにもかかわらず、神を愛している者にとっては、この神の母親的な側面、神の恩寵を信ずることしか救いの道はないであろう。そこで、『緋文字』においても、ディムズデイルが告白へと導かれるのは、父なる神（裁き、律法）への信仰からではなく、神の母なる面（恩寵、愛、ゆるし）への信仰が育っていったからではないだろうか。

“There can be, if I forebode aright, no power, short of the Divine mercy, to disclose, whether by uttered words, or by type or emblem, the secrets that may be buried with a human heart.” (Chap. X, 131)

“Heaven would show mercy,” rejoined Hester, “hadst thou but the strength to take advantage of it.” (XVII, 196)

“I could recall one instant of peace or hope, I would yet endure, for the sake of that earnest of Heaven’s mercy.” (XVIII, 201)

“I seem to have flung myself -- sick, sin-stained, and sorrow-blackened -- down upon these forest-leaves, and to have risen up all made anew, and with new powers to glorify Him that hath been merciful!” (XVIII, 201-2)

“in the name of Him, so terrible and so merciful, who gives me grace, at this last moment, to do what-- . . .” (XXIII, 253)

“and God is merciful! Let me now do the will which he hath made plain before my sight.” (XXIII, 254)

“God knows; and He is merciful! He hath proved his mercy, most of all, in my afflictions.” (XXIII, 256)

ヘスタがディムズデイル牧師に諭した「天の慈悲」の信仰に、彼は目覚め始め、徐々に告白する力を得ていったことが、この引用一覧に認めることができる。

エーリッヒ・フロムは、「カトリシズムにおいては、母は教会によって、また、聖処女によって象徴されている。プロテスタントシズムにおいてさえも、母の姿は隠されたままになっているけれども、完全に根絶されてはいないのである。」³⁴と叙述している。ホーソーン自身、ピューリタニズムの厳格過ぎる教条主義を嫌っていた。キリスト教史から見ても、ニューイングランドのピューリタン信仰が不寛容であったことは否めない。その欠点を緩和するために、どうしてもホーソーンは作品中に、カトリック、聖母マリア、天使、といった女性的な柔らかい要素を挿入することを必要としたのである。

残念なことに、ホーソーンは、真の新しい啓示をもたらす女性は暗い汚点や罪がある女性であってはならないとヘスタ自身に言わせることによって、彼女の数十年間の “a Sister of Mercy” としての生き方を完全に高く評価することを止めている。

Earlier in life, Hester had vainly imagined that she herself might be the destined prophetess, but had long since recognized the impossibility that any mission of divine and mysterious truth should be confided to a woman stained with sin, bowed down with shame, or even burdened with a life-long sorrow. The angel and apostle of the coming revelation must be a woman, indeed, but lofty, pure, and beautiful; and wise, moreover, not through dusky grief, but the ethereal medium of joy; and showing how sacred love should make us happy, by the truest test of a life successful to such an end! (“ Conclusion ” 263)

ただしこの箇所から分かることは、ヘスタには若い頃からそういう女性に対する憧れがあり、もしかしたら自分も神に導かれて女預言者になるのではないかと思われたこともあったという事実である。しかし、一種の政略結婚、結婚生活への幻滅、新しい愛、子育て、という女性の

宿命とも言うべき現実を歩ませられ、17世紀だけに終わらない、現代にも通じる女性像が形成されていった。『緋文字』の中で、ヘスタは罪の故に、つまりピューリタン社会の規範に違反することで、逆に「自由な思索」を手に入れたが、その思索こそ女性共通のものではないかと、ホーソーンは筆を進める。この点が、女性としての人生経験を経ずに修道女になる宗教的女性とヘスタが全く異なる点である。そして、この苦い経験こそが女性一般の共通体験と言えるもので、この女性であるが故の苦悩にいかに対処していったら良いのかというのが、子育て後のヘスタの人生の課題でもあった。

And, as Hester Prynne had no selfish ends, nor lived in any measure for her own profit and enjoyment, people brought all their sorrow and perplexities, and besought her counsel, as one who had herself gone through a mighty trouble. Women, more especially, --in the continually recurring trials of wounded, wasted, wronged, misplaced, or erring and sinful passion, --or with the dreary burden of a heart un-yielded, because unvalued and unsought, --came to Hester's cottage, demanding why they were so wretched, and what the remedy! Hester comforted and counselled them, as best she might. She assured them, too, of her firm belief, that, at some brighter period, when the world should have grown ripe for it, in Heaven's own time, a new truth would be revealed, in order to establish the whole relation between man and woman on a surer ground of mutual happiness. (" Conclusion " 263)

以上が、ヘスタの“a Sister of Mercy”としての面である。『緋文字』においては、主人公はディムズデル牧師であり、彼の告白へのプロセスが前面に出てきているわけであるが、その影にあって、彼を墮落させる原因になったのも彼女かもしれない。しかし、作品の中においては、むしろ、彼のために祈り、彼が真に生きようになると手差し伸べる女性として、さらには隣人にとっての「憐れみ深い姉妹」としての、このアイデンティティーの方が、ヘスタの生涯の中では最も長かった彼女自身ではなかったかと考察されるのである。

-
- i 「『緋文字』研究(1) -- ヘスターの姦通とイヴ性 --」(『英文学論叢』第38巻、日本大学英文学会、1990) 35-45. 「『緋文字』研究：ヘスターにみるグレート・マザー性」(『フォーラム』創刊号、日本ナサニエル・ホーソーン協会、1991) 13-21.
 - ii *The Encyclopedia Americana International Edition*, Vol.24 (Connecticut: Americana Corporation, 1829) 850. *The New Encyclopaedia Britannica*, Vol. IX (Chicago: Encyclopaedia Britannica, Inc., 1973-1974) 240.
 - iii エーリッヒ・フロム『愛するということ』(紀伊国屋書店、1973)
 - iv *Oxford Advanced Learner's Encyclopedic Dictionary* (Oxford: Oxford University Press, 1993)
 - v エーリッヒ・フロム、前掲書、92-93ページ.
 - vi エーリッヒ・フロム、前掲書、91ページ.

